



故 沖 中 靖 先生

沖中靖先生（2014年8月10日永眠，81歳）

▷略 歴◁

1933年3月21日	出生
1951年3月	京都府立福知山高等学校卒業
1957年3月	京都工芸繊維大学繊維学部卒業
1963年3月	同志社大学工学部卒業
1963年4月	京都大学大学院農学研究科入学
1965年3月	京都大学大学院農学研究科修士課程修了
1968年3月	京都大学大学院農学研究科博士課程修了
1968年4月～1971年3月	同志社女子大学専任講師
1971年4月～1977年3月	同志社女子大学助教授
1977年4月～1998年3月	同志社女子大学教授
1980年4月～1995年3月	同志社女子大学大学院家政学研究科教授
1995年4月～1998年3月	同志社女子大学大学院生活科学研究科教授
1998年4月～2003年3月	同志社女子大学特別任用教授
1998年4月～2003年3月	同志社女子大学大学院特別任用教授
2003年4月	同志社女子大学名誉教授
1981年4月～1983年3月	同志社女子大学教務部長
1986年4月～1988年3月	同志社女子大学家政学部長兼大学院家政学研究科長，食物学科主任
1994年4月～1995年3月	同志社女子大学家政学部長兼大学院家政学研究科長
1995年4月～1996年3月	同志社女子大学生活科学部長兼大学院生活科学研究科長
1973年2月～1974年1月	在外研究 ハワイ大学留学
1983年8月～1984年7月	在外研究 米国カリフォルニア大学留学

▷学 位◁

農学博士

▷主な担当科目◁

生化学，生化学実験，化学実験，栄養学総論，栄養化学，有機化学，栄養学特論

▷所属学会◁

日本生化学会，日本農芸化学会，日本ビタミン学会，日本栄養・食糧学会，日本食品科学工学会，日本家政学会

沖中靖先生を偲んで

沖中ファミリー、私たち栄養化学研究室出身者は自分達のことをこうよんでいる。これも沖中先生が私たちのことを家族のように思って接してくださったからである。その中で私たちは思いっきり実験し、思いっきり遊び、大学4年次の1年間を過ごして巣立っていった。ここが自分の原点だと思っている卒業生は多い。私もその一人である。1年に1回開催するリ・ユニオンを多くの卒業生が楽しみにし、自分の原点を確かめに帰ってくる。先生は、定年退職後も必ず出席してくださり、ご自分の近況をお話してくださった。私たちは、変わらずお元氣な先生の姿に元氣と勇氣をもらい、気持ちを新たに1年を過ごす。そんな大きな、大きな存在を今年8月に失ってしまった。

急なことだった。今年の6月にもリ・ユニオンでお元氣な姿を見せてくださっていたし、愛宕山に行ってきたよと言って、火酒要慎のお札を実験室と研究室に掛けてくださった。先生らしくお札が汚れないようにビニール袋に入れ、セロハンテープでしっかり留めて。また、立木観音に行ってきたよと言って、厄除けのお箸をもってきてくださったり、私がよく喉を痛めて咳込むので、東寺の飴を買ってきてくださったり、退職後もいろいろと気に掛けてくださっていた。4ヵ月半たった今も、お亡くなりになったことが嘘のようで、不意に研究室のドアを開けて笑顔で入ってこられるような気がしてならない。

沖中先生は昭和43年、35歳の時に本学に来られた。偶然にも私もこの年に入学した。4年次の時に栄養化学研究室を希望して先生のゼミ生となり、以後助手として、院生として、研究生としてご指導いただいた。そして同じ教員として、先生が定年を迎えられ、退職されるその日まで共に歩んできた。研究室のモットーは「よく学び、よく遊ぶ」で、一人前に遊べないものは勉強もできないというのが先生の持論だった。私たちは朝から晩まで一生懸命実験に取り組んだし、よく遊びもした。先生の下で学んだゼミ生は452名、院生は17名である。先生の実験に取り組む姿勢、ものの考え方、生き方から私たちは多くのものを学び、それを今それぞれの場で実行している。

ちょうど10年前、先生が定年退職されたことを記念して講演会と祝賀会を開いた。卒業生の約半数の211名がお祝いに駆け付けた。講演会では、同志社女子大学での35年間の歩みを卒業研究と重ね合わせて思い出深く語ってくださった。スライドには卒業論文のタイトルとゼミ生の名前があり、出席者一人一人の名前の下にアンダーラインが施してあった。先生らしいお心遣いだった。先生のお名前は、靖と書いておさむと読む。先生がお生まれになったとき、うぐいすが美しい声で鳴っていたそうで、会の終わりに「鶯長夢」と題してうぐいすが長い夢を見ているというお話で締めくくられた。私たちに夢を追い続けることの大切さを忘れないように示してくださったのだと思う。

あれからまだ10年である。その間も喜寿のお祝い、2年前には瑞宝小綬章受章のお祝いの会も開いた。このとき、先生は皆の健康を願い、お守りにと自ら集められた三鈴の松を礼状に添えて私たちに手渡してくださった。次は米寿のお祝いの会だと誰もが信じていた。今から思えば、その年にペースメーカーを入れる手術をされることになり、その頃から少し健康面で心配がおありだったのかもしれない。毎朝、般若心経の写経を欠かさず続けておられたそうで、約2年分のその束を見せていただいた。先生らしい整った美しい文字が並んでいた。日付があり、健康を願う言葉が添えられていた。

お亡くなりになる3日前、奥さんをお呼びになり、「終わったな」と言われたそうだ。奥さんが何が終わったのかと尋ねられると、「い・の・ち」と答えられたそうだ。何もかも、ご自分の最期までもわかっておられたように思う。私たちに少しも弱いところを見せず、颯爽としたお姿だけを残して逝かれた先生を格好いいと思う。でも、最後にもう一度お会いして心からありがとうございましたと言いたかった。

栄養化学研究室 仲佐 輝子